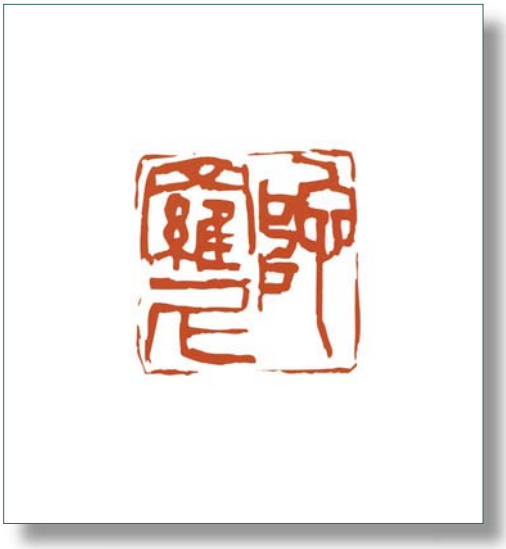
あさ 7

2009

阿佐ヶ谷住宅内



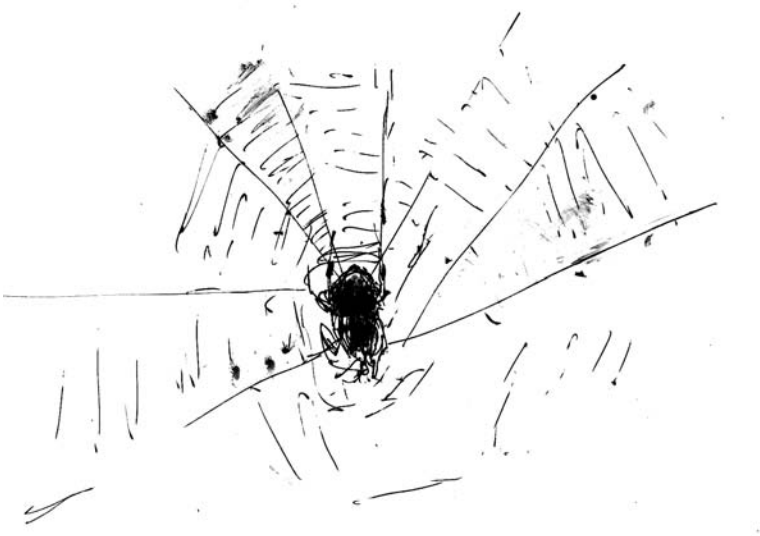
陀羅尼　　保多孝三著『柞廬印存』(一) より
昭和 28 年

梵名ダーラニーとは、仏教において用いられる呪文の一種。陀羅尼は暗記して繰り返しとなえる事で雑念を払い、無念無想の境地に至る事を目的とした。陀羅尼の本文が意味希薄な言葉なのは、これが本来無念無想の境地に至る事を目的としていたため。(Wikipedia 抜粋)
『枕草子』199 段に「陀羅尼はあかつき。讀經はゆふぐれ。」とある。

右の印影は山田正平刻「陀羅尼」二印を並べて鑑賞すると、作風の違ひがよく解る。山田先生は何歳の時制作されたんだらうか。保多先生は 45 歳の作品。

あと

七　　月



びい玉

本町三　佐藤喜孝

開脚のキリンのうなじ春の水
釋迦牟尼の堂外びらき春の雲
びい玉はぬれやすきもの春の暮
びい玉に夕日こもりぬ遠き代に
囈言を聞いたと言はる聖五月

（一部『俳壇』5月号より）

落合　森　理和

二輪草夕暮れ迫る下山道
面貌の爆発寸前朝の雉
胸を張り悠然と雉大向う
山法師苞に止まる花粉の黄
筒鳥の幽かに確と橅平

陽炎へる戯れをりし池の魚
小鳥きてのど潤せり夏の露
到来のふきの煮物や昼下り
溝川のほとりにゆらぐ額の花
薫風や石像の犬撫ぜてみる

東大宮　山荘慶子

那須塩原

ロッジへの道どこまでも楢若葉
フリスビー花を揺らして高く飛ぶ
栃の花蝮注意の立看板
ワゴン車で来し釣人に野山吹
履きなれた靴で五月をよく歩き

本町三　吉成美代子

揚羽蝶面(おも)をしづかに羽根つかふ

漢江を指でおさへる春の蠅

滝の上の春の月なれ物憂けれ

さはさはと息はづませて新樹光

卯月晴能登半島の白帆かな

鍋屋横丁　吉弘恭子

花一枝

鴨引くやつぶやき眠る雨後の沼

西行のまなざし置くか花一枝

野良に逢ふ人はかぐろし芽木夕べ

おもかげや葉かげに青む夜の残花

晩春や明王火炎蒼なせり

西浦和　渡邉友七

遠来の客

ビル群も首都高速も薄暑かな

ぬひぐるみにキウイ加はり五目鮨

刻刻と車窓に迫る雪解富士

はじめての日本彩る賀茂祭

辞書の人計算機の人青嵐

清瀬　赤座典子

竹の子のひと日を計る育ちかな

夕牡丹しまひ忘れし雛人形

夕立を斜にかまへて北斎画

孫つれて夜店の花火買ひにけり

千年の杉の下なる沙羅の寺

曳舟　遠藤　実

逗子　鎌倉喜久恵

夏萩の佛足石に散りかかる
古寺の句碑汐じめりして蔦青葉
鐘楼は高処にありて月涼し
八脚門仁王納めて青葉闇
大名の陣屋のあとや椎の花

川崎・小田栄　木村茂登子

夏　祭

宵宮は嫋々たるや笛の音も
田の神の宵宮に慈雨の降臨す
ひょっとこの腕たくましや里神楽
三社様産土神も夏祭
八頭身御輿仲間の姉御肌

五の橋　光林寺

残雪に桜も咲いて湯殿山
耀へる雪解水満つ月山湖
新しきズボン捲る子昼薄暑
母の日の夜に嬉しき子の電話
川越の古着屋で買ふ夏の帯

白金　斉藤裕子

肩広き浴衣鬢付油かな
慰霊堂いてふ若葉に魂宿る
若竹や溶けて了ひぬ塩地蔵
葉桜や舟形の墓回向院
下町に下水の匂ひ蛇いちご

京橋　篠田純子

千駄木　芝　尚子

透明なしじま廣がる蟻ぢごく
白ぼたん赤子は眠りつつ笑ふ
ばら咲きて鉄扉は錆を深めゐし
酢を利かせ飯粒立たす五月かな
夏来るキリンのやうな少年に

宝仙寺前　芝宮須磨子

登　る

歩道橋使はずにゆく五月雨
弾みつけ石段登る椎若葉
少年の夏服きりり通学路
胡瓜揉み箸一膳の厨ごと
弟とメール交して傘雨の忌

うまごやし

定梶じょう
剱地東出（つるぎちひがしで）

爪立てて猫が伸びして麦の秋
遺品この海泡石のパイプかな
先生の坐りさうなるうまごやし
瓦葺く薄暑の沖へ尻揃へ
にのうでといふ眩しさや更衣

所沢　須賀敏子

山法師花の白さや父母の墓
こどもの日翔馬二才の足力
初夏の山道五才に追ひ越され
気に入りの白磁の茶碗新茶汲む
マーマレードの甘さ控え目夏初め

村中が菜の花明り波の音
静けさや日がな一日桜蕊
夕風や天女の舞の芝桜
母の日の母は疲れてをりにけり
絵画館日傘の母子出て来さう

本町三丁目　鈴木多枝子

たましひの雫を切って夏に処す
起上るたび眩むも花のころ
呼出し音三回でやむ夏日かな
うすぐらく涼しき視力検査室
老犬のひるね虚空を蹴りつづけ

浦和　竹内弘子

夕薄暑母の所望の焼豆腐

みちのくの野蕗野武士のやうな味

籠枕羽化登仙の途中なり

五月場所了りたる夜の大雷雨

緑陰に人静かなり慰霊堂

田端　田中藤穂

自転車の籠に葉付きの夏大根

青田風減塩菜食まだ半ば

無患子の青葉砂場に園児跳ね

前まはり出来た子供に風薫る

臍天に向けて仕舞の夏稽古

三光坂　東亜未

實を結ぶ日まで楽しや苗木買ふ
苗木植う育て育てと磨ぎ汁を
苗木植う日毎蕾を慈しむ
香を隠し可憐さ集ふ韮の花
常の日の不安を除く花南天

富田　長崎桂子

燕

雛罌粟や空の果まで軽やかに
かまきりの卵残して枝剪りぬ
初燕夕日に染まるほど飛べり
河川敷工事中なり燕飛ぶ
当分は通ふ道なり燕の巣

大宮　早崎泰江

新茶古茶茶どころ出身ちゃっきり節
新茶汲む次郎長ばなしちゃっきりよ
お茶つみや富士の笠雲雨ずらよ
仕事上手で無口な娘きゃある鳴く
新茶の香居並びて今日会長選

町屋　藤野寿子

かくれんぼ

父の日は第三といふかくれんぼ
それやうとして突き当り梅雨の傘
紫陽花や瞬きすればまばたかず
悪人が増えいつまでも梅雨開けず
人工呼吸ビルのはざまに夏の雲

河田町　堀内一郎

風光るかるがるうごく芝刈機

難しき四股名が続く夕薄暑

ばつさりと菖蒲投入る野天風呂

北方の千島桜も咲き揃ふ

カラフルなゴルフウエアー夏に入る

中井　森山のりこ

一人一句

新宿霾天大和金剛屹立す　佐藤喜孝

満月の光伴ふ花吹雪　森山のりこ

春の風座右に備ふる鉄亜鈴　森　理和

ぶらんこの揺れの残れり宵の庭　山荘慶子

かんばせをすつとすぎたる花の影　吉弘恭子

まろき雲一つ浮べて春はゆく　渡邉友七

いくたびも風乗換へる紋白蝶　赤座典子

天牛の呪文はきかぬ子供の眼　遠藤　実

図書館の窓を落花のかすめとぶ　鎌倉喜久恵

春眠のやうなる虚子のデスマスク　木村茂登子

あっぱれな晩年であり花吹雪　斉藤裕子

いつまでも春なり虚子の旅鞄　篠田純子

前月作品

會釈してはて誰ならむ落椿　芝　尚子

隠しごと少しはありぬ四月馬鹿　芝宮須磨子

靴といふ字を率て気球山笑ふ　定梶じょう

お隣に赤ちゃんの声青木咲く　須賀敏子

挨拶を交しながらの花の道　鈴木多枝子

動物園大きな蝿の生れつぐ　竹内弘子

鶯やいつも小暗き四畳半　田中藤穂

華鬘草過去あるごとく井戸覗く　東　亜未

風出でて日暮の明り二輪草　長崎桂子

新駅に溢れんばかり新入生　早崎泰江

ゴールデンウイーク予報士縞ネクタイ　藤野寿子

いよいよ立退き長かった戦後の夏　堀内一郎

喜孝　抄

六月作品より

王岩・佐藤喜孝

白梅やむかし〳〵の刀きず　佐藤　喜孝

古木の白梅は春になる度に清らかに咲き誇る。鉄のような幹には、大昔の刀きずがまだくっきりと残っている。何か歴史的な事件で残った刀創であろうか、白梅は歴史の証人のような顔をして、年年歳歳、純白な花を咲かせる。

満月の光伴ふ花吹雪　森山のりこ

昼間に花見の観客でごった返していた混雑は、夜が更けると嘘のように消えて、周りはまた清寂の世界に戻った。折から桜がはらはらと散り、月光に照らされた花吹雪は美しい。

あしあとに足跡のせて花の径　吉弘　恭子

一面に落花の散り敷いた小道。残っている数多の足跡。あしあとの上に足跡を重ねて、落花を踏んで歩いていった人々の姿を髣髴させる。

危ふげなスカートの丈春の風　斎藤　裕子

春風に危うくスカートの丈が捲り上げられそう。「あら、春風の悪戯」と、慌ててスカートを両手で押さえる女性の姿が浮かび上がってくる。女性の視線から詠まれた句作なので、卑俗さを微塵も感じさせずに、春風の不意な悪戯に狼狽えている女性の周章狼狽をユーモラスに描いた。春の市中の一齣であろうか。

十数年前か、僕も「春一番うなじの白き乱れ髪」と、男心を大胆に詠んだことがある。文字通りの駄句だったが、異国の町中での艶っぽいスケッチを句に表現した思い出の一句である。

筍と友の近況届きたる　鈴木多枝子

友人から筍の小包が贈ってきた。夏の味覚

を堪能しながら、遠くにいる友人の近況を思いやってホッとしている。味覚を通して友情の美しさを表現している句作である。

蕪村は「王子猷訪戴安道」(『世説新語』任誕篇)の物語を踏まえて、「鮎くれてよらで過行夜半の門」と、鮎の清爽感を通して友情を詠んだ。

新駅に溢れんばかり新入生　　早崎泰江

新駅、新しく建設された駅か、それとも綺麗に塗り直された駅か。恐らく後者であろう。桜の咲き乱れる頃、その駅は新入生で埋め尽くされている。どの新入生も明るい表情で浮き浮きしていて、将来に向けて、大きく夢を膨らませている。

新駅は新しい人生への始発駅を象徴している。

席ゆづられし礼深々と春愁ひ　　堀内一郎

まだまだ若い気でいるのに、知らないうちに、余所目には老人に見えてきたか、近頃、乗車する度に、親切に席を譲っていただく場合が多くなった。

春麗らかな一日、またもや席を譲られた。有難さを沁み染みと味わいながらも、そこはかとなし愁いをも感じるようになった。

鶯やいつも小暗き四畳半　　田中藤穂

日当たりの悪い和室。広さは丁度、リラックスのできる四畳半。日当たりの悪さのお陰で、日本的な陰翳の美しさを満喫できる空間となる。

ある日、その空間で寛ぐと、鶯の囀りが聞こえてきた。ああ、春は来た。

翡翠は残影ばかり春の川　　森理和

翡翠　カワセミと読む。スズメより少し大きい小鳥。尾は短く、嘴は鋭くて長く、足は赤い。体の上面は暗緑青色、背・腰は美しい空色で、「空飛ぶ宝石」とも称される。特に両翼の間からのぞく背中の水色は鮮やかで、光の当たり方によっては、緑色にも見える。「翡翠(ひすい)」という名前の漢字表記はここに由来した。水辺にすみ、小魚やザリガニなどをとって食う。

春の川は眼前に広がっている。滾々と流れ去る野川の春水を見ているうちに、翡翠を見てみたいもと思うが未だ叶わない。まわりの人は見たのに自分だけは見損なってしまった。美しい残像である。

翡翠は留鳥ではあるが、なぜか夏の季語である。　（この句五月号の訂正　以上王岩）

いくたびも風乗換へる紋白蝶　赤座　典子

目まぐるしく飛ぶ紋白蝶のさまを斯様に魅力的に表現した。鷹は上昇気流を乗りかへながら高みに達するときくが蝶もさうなのだらうか。紋白蝶の飛ぶ様がうれしさうに見えてくる。

春眠のやうなる虚子のデスマスク　木村茂登子

いつまでも春なり虚子の旅鞄　篠田　純子

吟行で 神奈川近代文学館に「虚子没後50年記念子規から虚子へ―近代俳句の夜明け―」へ。俳句黎明期の資料が見尽くせないほど展示されてゐた。かういふところで俳句が出来るかと思つたが杞憂であつた。掲句が証左である。虚子の人生を春と表徴した捉へ、それを具象化した佳句である。虚子の葬式の間中同人達は口々に「先生は春の人だった」と語り合ったさうだ。（福田蓼汀による）

ゴールデンウイーク予報十縞ネクタイ　藤野　寿子

テレビ画面でゴールデンウイークのお天気の解説をしてゐる。作者は予報の内容もさることながら縞のネクタイに目がいった。私はネクタイに無縁の生活なので縞ネクタイがどのやうなものか解らないが、フォーマルな雰囲気なのであらう。これからの連休を言祝ぐかのやうに思へ、おかしみを感じたのである。寿子さんの句づくりは面白い。特に表現方法に特徴がある。一つのテーマをいろいろな角度で作る事もさうだが、物で語らせ、名詞のみでおしとほさんという気概が見える。残る課題は、掲句のやうに表現する的をしっかり見据ゑることである。

（以上　佐藤喜孝）

あをキーワード俳句辞典（お）

丘

茶の花のちりばめられし畝の丘　赤座　典子
古木には古木の氣品梅の丘　森山のりこ
松落葉風土記の丘を覆ひけり　鎌倉喜久恵
夕立やパッチワークの丘烟る　須賀　敏子
威し銃丘の赤松聳えけり　定梶じょう

おかあさん

おにぎりのまんまんなかのおかあさん　佐藤　喜孝

拝む

夏の湖舟より拝む赤鳥居　森山のりこ

小川

合併の村の小川に蜷の道　須賀　敏子
舗装路の小川となりし秋出水　長崎　桂子

沖

サーファーの沖へBGM流す　竹内　弘子
黒潮の沖に四股ふむ入道雲　関口　ゆき
日脚伸びる岬は沖へのびにけり　定梶じょう
沖へ風巻く波の裏側おもて側　吉弘　恭子

奥

訥弁の鶯良けれ奥の院　篠田　純子
築地時雨刃物屋の奥刃物研ぐ　田中　藤穂
飛騨晩春奥行き深き民芸店　森山のりこ
笹鳴の奥は縞なす日矢すだれ　渡邉　友七
小面の目の奥に見る春の闇　芝　尚子

屋上

屋上に鳥居の朱く梅雨晴間　山荘　慶子
屋上の十字架を映し水の秋　竹内　弘子
屋上の鉢の収穫茄子一つ　東　亜未

送る

母送るいつもの道の秋桜　須賀　敏子
逝く年を母と並びて送りけり　鎌倉喜久恵
冬桜言葉選みたる文送る　斉藤　裕子

遅れ

十六夜や遅れし帰路をかがやかす　長崎　桂子
上海は一月遅れ姫つばき　堀内　一郎
遅れ癖今もつづきて十三夜　吉弘　恭子

近世俳諧と漢詩文 2 弐拾壱

王　岩

妾薄命

実は採られ剪らるゝ梅の茂りかな　　淡　々

「妾薄命」とは楽府雑曲歌辞の名で「美人薄命」を嘆くものである。漢の許皇后の詩「奈二何妾薄命一」とあるのに由来する。梁の簡文帝以下に作品があり、王昭君や陳皇后、班婕妤などを詠むものが多い。唐詩人も「妾薄命」という題で詩をよく詠み、例えば、李白には漢武帝に廃された皇后陳阿嬌を詠んだ「妾薄命」がある。

……

雨落不上天、　雨　落ちて　天に上らず

水覆難再収。　水　覆つて　再び収め難し
君情与妾意、　君の情と妾の意と
各自東西流。　各自東西に流る

昔日芙蓉花、　昔日の芙蓉の花
今成断根草。　今は断腸の草と成る
以色事他人、　色を以て他人に事ふ
能得幾時好。　能く幾時の好きを得たる

淡々は松木氏。延宝二年（一六七四）～宝暦十一年（一七六一）。大阪の商家の生まれである。はじめは京都で一傘と名乗り、江戸に出て晩年の芭蕉に学び、呂国と号した。芭蕉没後は不角に従って因角と称し、さらに其角については渭北と号した。其角没後、淡々に改めた。編著に『紀行誹談』『淡々文集』『淡々発句集』などがある。問題の句は『淡々発句集』に載る。

淡々が「妾薄命」を題に詠んだ句は、楽府題を字面に取ったユーモアで、不運に泣く妾の姿を描いた。腹を痛めて生んだわが子と無理やりに引き裂かれ、棄てられた妾の悲しみを俳諧的に詠んでいる。

松木淡々

暁や灰の中よりきりぎりす
暑き日や桑に抱き付くめくら鶏
漸くや時雨のうらのあらび馬
梅もどきいまだ楊家の娘かな
此の花や誰に答ふる一枝禅
佐保姫の男いそぎや年のうち
はつ雪や波のとどかぬ岩のうへ
父あらば此柱にぞけふの月
飛ける歟鵝の声はなし木々の蝉
一升は辛き海よりしゞみ取り
京へ痩せて玉巻芦辺花の雛
別に夏おくは奥山から葵
飛花を切て搏(ハウツ)や朝燕
文字むすぶ嵐の芦の螢かな
月寒し烟を昏に梅の筆
千とせふる江に花もちるらん
初鳫と共に昨雨の檐の声
亀の子の春の日影をあらそひて
実はのして宿は千とせを玉の菊
池照や雨間を春のうす氷
明の春箱根のうみの嵐山
道を聞て夕に活る風の音
すゞしさの富貴は来たり松の月
民は手を帯にはさむや野分跡
鷺にふまれ鴎を追ふや蔓真桑
其義一としどし冨士の山ざくら
よし生て何を春風上無月
欽(つとめ)哉(とや)蚊にかはらせる人と家
養老の水たま甘し腐り瓜
死んで逢ふ鹿もあるらん筒の中
木賊の脱ぎて逃たるねぶかかな
惚たとはしらぬがほのか若艸葉
薫る日やすだれも伊予の右左
ふとく書けふたゝび花の橋ばしら
我色をこぼして軒の時雨かな
一二(つまびらか)んり秋の月草の花
夜に克(かち)ておもひかへせば花石榴
亀の手を引も亀井の水の春
夕立の雨は君子のいかりかな

あをかき集

堀内一郎選

（六人目以降五十音順）

一病の不治と告げらる著莪の雨　渡邉　友七
ほととぎす双掌につつむ朝の椀
寝の刻の墓鳴く闇へ落ちゆけり
桐咲いてにはかに空のひろがれり
蛙鳴くや家の暗きに月昇る　藤野　寿子
アロハシャツ町会改革空まはり
会則をガラス張りにと扇子振る
とりしきる甚平はつらつ無尽講
竹床几関西なまり空元気
日の永し激辛めんは買ひしまゝ
袋まだ開けぬ新茶の音さらさら　芝　尚子
子の低き鼻までとどくシャボン玉
蜜豆を満たして青き江戸切子
蕗の葉を煮つめ夜更けのしづごころ
ひと夜さの雨のぼたんに鋏入れ
十薬に家囲まれて雨ひそか　鎌倉喜久恵
鎌倉の露地に一輪鉄線花
月見草海の夕日に濃く染みぬ

アウンサンスーチーさんの百合の花　篠田　純子
青葉風腹から歩む相撲取
五月場所消毒をする力士の手
戒名に貞の字のあり桐の花
をさなごの見つめる先に鶏交る

夕焼を十字に切って初燕
夜釣人板一枚の橋渡る
聖五月鏡の中に般若をり
夏空やげんこつ交互に風を切る
よく噛めの病気見舞や夏初め
五月晴パセリの鉢にパセリの芽
五月憂し腰につけたる万歩計
蝶二匹たはむれるごと土手の草
少女等のクラリネットに若葉風
歯を抜きし医院の窓の柿若葉
旅土産中に椶の芽こごみの芽
掃除の手止めしアルバム五月尽
清和なる軸に替へたる午下の席
夏初め螺鈿の棗手にやさし
初七日を控ふ女将の三社祭
鯉のぼり兜はいつも新聞紙
早苗月畦に三組の妻夫の輪
曲る腰伸ばしつ媼豆ご飯

東　亜　未

早崎　泰江

森山のりこ

森　理和

子に教へ子に教はりて緑の日
露天湯に沈みて那須の山つつじ
天道虫星を数へる男の子
さざ波の光の上に水馬
両の手ではさむ乳房の子に新樹
猫の眼に虹子供の両手にみどり
水没の地面に酸素子のはだか
雨季乾季あうらに痛い靴の底
籐座椅子八海山麓蕎麦処
雪線に鳩の留まれる朝曇
紫陽花や重き一輪葉を揺らす
雨上り足元を這ふ南風
亡き父は軍人なりし鉄風鈴
大西日軍歌むなしき街宣車
雲の峰屋内墓苑の花一輪
この道は虹の裏側に続きをり
飛ばされてタンポポの種一人旅
乳母車の兒は甘え泣き風薫る

吉成美代子

吉弘　恭子

赤座　典子

遠藤　実

木村茂登子

家人みな旅に出てをり柿若葉
藤波や舞妓の抓み簪も
若葉風双子抱かれて宮参り
改札の幅ほどの力士藍浴衣
置いてけ堀の看板新し青葉風
大銀杏の苔の新緑慰霊堂
母と子が学びし校舎風薫る
あぢさゐのピンク咲き初め街の角
取り出して句集の黴もなつかしく
五月闇入院準備あれこれと
田螺今まっすぐ這うてゐるつもり
からたちの雨ふってゐて止んでゐて
金鳳華めがね重しと思ふ日や
これよりの薄暑浚渫船繋かり
つつじ燃ゆ一日迷子になってみる
走り茶やひとり楽しむことに慣れ
行きゆきて赤城の五月木の芽立つ
遠足の子等一列に航空公園

斉藤　裕子

芝宮須磨子

定梶じょう

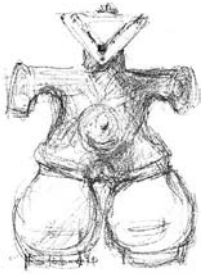
須賀　敏子

日帰りの旅こそよけれあやめ咲く
家長いつか我が名に変り桃の花
豆飯や里の空気の香りする
蚕豆を背負って来る母の事
唇に熱きカフェオーレ青葉潮
土産店貝殻並べ夏の海
海士舟に寄する夏汐鳶の笛
魚買って海にさよなら夏帽子
この路地は丹誠にして緑雨かな
目を瞑り香りに願ふ菖蒲の湯
鉢植の多彩な並び軒簾
昼時の魚焼く匂ひ軒簾

鈴木多枝子

田中　藤穂

長崎　桂子



一句燦々

アウンサンスーチーさんの百合の花　　純子

軍事政権に捕捉されているが愛国心に変りはない。時々テレビに放映されるが容貌の清楚さは白百合そのものである。

「戒名に貞の字」過去帳を見ると私の継母が純眞妙貞信女だった。

一病の不治と告げらる著莪の雨　　友七

ガンは治らないと聞かされているが、眼前でいわれるとショックである。私も不治の病を抱えているので他人事ではない。下五に無念がこもる。

アロハシャツ町会改革空まはり　　寿子

私の町会では昨今不祥事が起き改革となった。私、町会長だから良く解る。アロハは新たな風である。旧い体質と新人との噛み合せはなかなか難しいものだ。私は常に中立の立場。

蜜豆を満たして青き江戸切子　　尚子

即刻の一句。そこに今までの境位の結果が見られる。M・K音の扱いも並ではない。シャッキリ感に作者の風貌性格が浮かぶ。

十薬に家囲まれて雨ひそか　　喜久恵

なぜか都心でも路地の隙間に白い花を咲かせる。昔から残っていたのが増えるのであろう。幼いとき煎じたものを飲まされた。経験もあるので親しさと安堵感が伝わる。平穏な家居風景である。

聖五月鏡の中に般若をり　　東亜未

写っているのは般若面と思うが、それでは素っ気ない。一押しして自身と見る。来し方の喜怒哀楽を背にした。強靭な魂の持主である。

五月憂し腰につけたる万歩計　　泰江

五月病もあるので神経的に参っている。歩いて気を紛らすのも体には良い。「ごとき」「ごと」があったが今後は消したいものである。

初七日を控ふ女将の三社祭　　理和

悲しみを抱えての女将。岐路に立っての心情がうかがえる。常なら篭もるが、私は町会長であるが、私の父母弟の訃にも立場上参加した。（仏が祭好きを理由にして）

子に教へ子に教はりて緑の日　　美代子

教えられたり教えたり、一生勉強ということ。作品としては「水馬」が無心でよい。

両の手ではさむ乳房の子に新樹　　恭子

昔は町でも散見できたが現在ではこのような俗風景は見られない。今ではよいか悪いか、なつかしい場面を彷彿させる。この愛情の深さが後々まで尾を引くようだ。新樹は目の輝きと見た。

籐座椅子八海山麓蕎麦処　　典子

漢字で固めたが堅さを感じない。風が見えるからだ。大自然と鄙びた佇まいが心をくすぐる。

亡き父は軍人なりし鉄風鈴　　実

父を鉄風鈴と表徴、厳格さを思う。外面は堅いが音色は静かに心鎮まる亡夫の心情である。「虹の裏側」好奇心に拍車が掛かる。

飛ばされてタンポポの種一人旅　　茂登子

白い絮の飛ぶ景。「一人旅」で自身にも読み手にも跳ね返る。自由への憧れ願望。

若葉風双子抱かれて宮参り　　裕子

少子化を云々するが赤子の誕生は目出度いこと。町で双子の乳母車を見かけるが苦労も殊更。

母と子が学びし校舎風薫る　　須磨子

同じ母校とは心強い。思い出も通じて話題に花が咲く。私の処は旧校舎は戦災に会い新しくなったが、やがて区画整理で隣町へ新築。子供、孫達は同じ新校舎へ通った。だから同窓会で一緒になる。幸せとは思う。

田螺今まっすぐ這うてゐるつもり　　じょう

恐らく反れているのだろう。オカシサもあるが人間界では往々にしてみられる。自身半生の意も。

つつじ燃ゆ一日迷子になってみる　　敏子

不安もあるが気楽なご身分でもある。迷子ならスピーカーで呼び掛けもあるが、心配する人もいない。いやケイタイが鳴るかも。

日帰りの旅こそよけれあやめ咲く　　多枝子

一泊となると大変だが、東京から潮来、十二橋あたりなら気軽なもの。

唇に熱きカフェオーレ青葉潮　　藤穂

荒々しい怒濤を目の前に淑女が一人泰然自若。乙に済ましている。激しさとノーブルと。
読み手に開放感を与える。滋味の作。

この路地は丹誠にして緑雨かな　　桂子

丹誠とは路地が整然としている景と思う。閑静としても十分に通じる。熟語、漢字上下の配りは注意したが良い。息が抜けないから。

五月の句会

傳　中野区　カフェ傳

鶯やいつも小暗き四疊半　藤穂
薫風や乳母車の児の甘え泣き　茂登子
揚羽蝶面のしづかに羽根つかふ　恭子
老犬のひるね虚空を蹴りつづけ　弘子
海沿ひや新樹の息の溢れをり　藤穂
ひな芥子や空の果まで軽やかに　泰江
森閑とふくらむ柱春の夜　敦子
ブレーキのやうな泣き声青葉の夜　純子
漢方や薬膳や八十八夜かな　寿子
母の日や夜でも嬉し子の電話　裕子
なむあみだ破れた衣に若葉冷え　喜久恵
蛇苺母にこづかひもらひけり　綾子
懇ろに猫葬りきて枇杷を剥く　寒林
花は葉に人はかへらぬ日を重ね　尚子
子に教へ子に教はりて緑の日　美代子
夕雉子の爆発寸前赤き顔　理和
びい玉は濡れ易きもの春をはる

調（つきのみや）　真鶴吟行

青すすき初島指呼の間にあり　藤穂
いそぎんちゃく石のひとつのごとく坐す　綾子
青葉潮大島ひとつ流離めき　寿子
夏潮を見据ゑ尺八吹いてをり　敦子
初夏や鳶の滑空なめらかに　弘子

あを吟行会　両国・本所界隈

池の面風紋美しき五月かな　恭子
あどけなき力士の眼風薫る　裕子
青葉風腹から歩むすまう取　純子
緑陰に人静かなり慰霊堂　藤穂
暑き日の地震安政の鳥居墜つ　喜久恵
青葉闇写真古びし慰霊堂　綾子
五月冷え息のつまりし慰霊堂　寿子
風かをる池に流れの生じたる　喜孝

七座（ほくと）句会　中野区・小川苑

びい玉に夕日こもりぬ夏祭　喜孝
むらさきのかたちすがしき桐の花　房代
籠枕羽化登仙の夢の途次　藤穂
静けさや日がな一日桜蕊　多枝子
胡瓜揉み箸一膳の厨ごと　須磨子
半島の突端の波夏の蝶　綾子
卯月晴能登半島の白帆かな　恭子
糶へ馬牧は雲雀の空となり　寒林
父の忌に蝶と登れり歩道橋　純子
ばら咲きて鉄扉は銹を深めぬし　尚子
薫風や昨日の心の泥捨てる　東亜未
天皇がしろしめす國さくらんぼ　木枯

連句勉強会　未定
(090-9828-4244)

傳句会　毎月第2火曜
カフェ傳　森　理和
(03-3368-4263)

調句会　毎月第3金曜
岸町公民館　竹内弘子
(0488-86-3501)

あを吟行会
詳細は吟行案内で

七座句会　毎月第4火曜
小川苑　吉弘恭子
(090-9839-3943)

あを吟行会のお知らせ

八月　上野不忍池（蓮見）

集合地　**不忍池弁天様**

日　時　8月1日（土）午前11時

各自それまで吟行済ませて下さい。

昼　食　蓮玉庵（日本蕎麦）

申込み〆切　7月30日

申込先　佐藤喜孝　090 9828 4244

七月　角川庭園・幻戯山房

集合地　JR荻窪（新宿より改札出たところ）

日　時　7月19日（日）午前10時半

申込先　佐藤喜孝　090 9828 4244

あを柳集（佐藤喜孝選）　投句要項

第二回「深」

〆切　七月末日　用紙・句数自由

第三回「白」

〆切　八月末日　用紙・句数自由

送付先　東京都中野区中央二の五〇の三

二〇〇九年七月号

発行日　六月二七日

発行所　東京都中野区中央2-50-3

電　話　090-9828-4244　佐藤喜孝

印刷・製本・レイアウト　竹僊房

カット／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費　一〇〇〇円（送料共）／一年

郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）

乱丁・落丁お取替えします。